研　究

地域の文化財を用いた音声言語学習材の開発

―「理由を付けて説明しよう―雪舟作「四季山水図巻」を用いて―」（小学四年）―

山口大学 ● 坂東智子

一　はじめに

「地域」「伝統」「文化」といったキーワードによる教材集や授業実践が数多く報告されている。国語科に留まらず、「各教科等の年間指導計画から、地域や伝統、文化にかかわる内容を取り出し、扱う教材や関連のある他教科等の内容を確認する」[1]といった計画的な推進のもとに構想された実践も多数試みられている。

堀江祐爾（二〇〇八）は、義務教育の段階で、能や狂言、歌舞伎などの伝統文化の本物の舞台に触れる経験は極めて重要であり、それを単なる経験に終わらせずに、「言葉の学び」にする工夫を凝らすことが必要であるという[2]。矢澤真人（二〇〇九）は、郷土料理や竹とんぼ作りといった体験活動におけるコミュニケーションの実態調査報告の中で、直接講師が子供たちに教える手法のほか、指導員がまず親に教え、次に親が子供に教えるという手法がとられ、これにより親同士の会話が増え、子供たちも、他の大人たちと話し合う機会が多くなったと述べ、「体験活動と結んだコミュニケーション能力の育成」という、国語科教師の新たな役割と課題を提示している[3]。

地域の文化財を用いた総合的な学習においても、教師の工夫と適切な手立てによって、目標が明確な「言葉の学び」を成立させることは可能である。

本研究で取りあげる、山口市立白石小学校中谷仁美教諭による、単元「理由を付けて説明しよう―雪舟作『四季山水図巻』を用いて―」（小学四年）は、図画工作の鑑賞と国語科「話すこと・聞くこと」イ「相手や目的に応じて、理由や事例などを挙げながら筋道を立て、丁寧な言葉を用

いるなど適切な言葉遣いで話すこと。[4]」を目標とした単元である。指導要領には言語活動例として、「図表や絵、写真などから読み取ったことを基に話したり、聞いたりすること。[5]」が示されている。中谷教諭は、一枚の絵ではなく、地域にゆかりのある雪舟作の「四季山水図巻」を素材として図画工作と国語科を結んだ全三時間の授業を構想した。

「四季山水図巻」は、山口県毛利博物館に所蔵されている国宝である。十六メートルにわたる長大な画面に、春夏秋冬と移り変わる四季の景色を描き、その自然の中に暮らす人々を描き出している[6]。十六メートルの図巻のレプリカを体育館の壁に貼り、単元の準備学習として、一時間じっくりと絵を見る学習（図工）が行われた。

これまで創作文の指導に絵本や絵画を用いることの有効性を論じた先行研究[7]は多いが、「話すこと・聞くこと」学習に一枚または複数の絵ではなく、長大な絵巻を用いることの有効性を示した論考は、管見の限り報告されていない。

本研究の目的は、「話すこと・聞くこと」学習における地域の文化財を用いた学習材開発の実際と、学習を成立させるための教師の具体的な手立てを、中谷仁美教諭の実践を考察対象として明らかにすることである。

二　単元「理由を付けて説明しよう」の実際[8]

1 単元構想の背景

本単元が構想された背景として次の二点がある。

・本単元は、中谷教諭の勤務校山口市立白石小学校の平成二四年度校内研修会公開授業として構想された。同校の研究主題は、「心豊かにたくましく生きる子どもの育成～共感力を生かし、みんなが学び取る『共同的な学び』を求めて～」である。

・中谷教諭は山口県防府市の出身。同市の毛利博物館所蔵の「四季山水図巻」を最初に観覧したのは中学生の時である。その後、雪舟没後五〇〇年記念特別企画展（山口県立美術館、平成一八年）で、ハイビジョンテレビに春から冬へとゆっくりと映し出される図巻の映像を見て、季節がめぐり、人が実際に動き生活をしているように見えて衝撃を受けたという。『これが私の故里だ～山口県伝統・文化教材集～』に中谷教諭自身もアイデアを提供しており、同教材集の「四季山水図巻を通して雪舟の偉大さにふれよう[9]」（美術・中２）に興味を持ち、アイデア提供した教諭から直接話を聞いたり、県立美術館の学芸員の方に連絡を取って、「四季山水図巻」の特徴を知り、本単元の構想を固めた。

長い時間をかけ、いくつもの段階を踏んだ中谷教諭の「四季山水図巻」の文化財としての価値の内面化あって、勤務校の研究主題と結びつき、さらには、担任する四年生の各教科の年間指導計画、学習者の実態把握と結びついて、本単元が構想されるに至っている。地域の文化財を学習材と

して開発する際に、前提となるのが、教師が文化財の価値を内面化し、特徴を理解していることである。地域の専門家との連携も必要になる。「四季山水図巻」は、表現の苦手な児童からも生活と結びついた発言を引き出し、その発言が単元の目標を達成させる学習材となると中谷教諭は自身の「四季山水図巻」受容体験をもとに判断したのである。

2 単元設定の理由

中学年で育むべき言語の力（話す・聞く能力）として、理由を挙げて説明する力や、他者の理由の妥当性を判断しながら聞く力が挙げられる。本単元の素材とする雪舟作「四季山水図巻（山水長巻）」は、水墨画特有の省略された筆致で、移ろいゆく季節や人々の営みを描いたものである。色彩を押さえた水墨画だからこそ、児童の経験や感じ方によって見方や感じ方に差が生じることが予想される。お互いの見方や感じ方を理解し合うためには、理由を挙げて自分の考えを説明する必然性が生まれてくるであろう。お互いの見方や感じ方を、その理由と共に理解し合う活動を通して、自分たちなりの解釈を創り上げる「共同的な学び」が展開されると考える。（一部を筆者が抜粋した）

「四季山水図巻」は水墨画である。色彩が押さえられているため、児童の見方や感じ方に差が生じやすい。そこに、「理由を挙げて説明する」必然性、「他者の理由の妥当性を判断しながら聞く」必然性が生まれるであろうと中谷教諭は考えた。「四季山水図巻」の特徴が、四年生で身に付けさせたい言語能力の育成と結びつき、新たな音声言語学習材が開発されている。

中谷教諭は、「四季山水図巻」は文化的価値を内在させた素材であり、図画工作の学習材にも、国語科の学習材にもなるとの考えをもっている。素材が引き出した児童の発言が国語科の音声言語学習材であるという見解である。「四季山水図巻」は、地域にゆかりの雪舟の作品である。学習者が親しみを抱きやすい。描かれているのは季節の移ろいや人々のくらしであり、学習者の経験、実生活と結びつきやすい。さらに、十六メートルもの長大なレプリカを用いた学習は、学習者の興味や関心を喚起する。図巻を四年生の発達段階に適した、音声言語の学習材となる発言を引き出すと見極め、授業化したところに高い提案性がある。

3 単元の目標

絵画から見つけた必要な情報を理由として挙げ、自分の考えを説明する。（第３学年及び第４学年「話すこと・聞くこと」イ）

4 単元の中核となる言語活動

「四季山水図巻」から、季節や音を見つけ、なぜそう思ったのか、理由を挙げながら説明する。

5 単元計画（全３時間）

①「四季山水図巻」から春と冬を見つけ、理由を付けて説明する。（中谷教諭）
②「四季山水図巻」から、音をみつけ、理由を付けて説明する。（中谷教諭）
③雪舟や水墨画について知る。（図画工作：鑑賞）
（中谷教諭と山口県立美術館学芸員とのＴ・Ｔ）

三時間目は山口県立美術館の学芸員を招いて直接話を聞くという体験型の図工の授業が行われた。山口県立美術館や「雪舟庭」は白石小学校の校区近くにある。児童の生活と結びついた、地域教材ならではの単元計画である。

6 単元における教師の支援

・自分の氏名を書いた付箋を画面上に貼ることで、理由を発表する時の手掛かりとし、同時に、自分と他者の理由の比較が視覚的にも可能になるようにする。
・「だれの説明に納得したか」と問うことで、言語で説明することに児童の意識を向けられるようにする

一時間目「四季山水図巻」から春と冬を見つける授業では、冬と思う箇所には青、春にはピンクの付箋を貼らせている。自分の発見を視覚化して、発表の手がかりにするためである。また、同じ場所に貼られた付箋であっても、色のちがいで意見が同じか違うかが顕在化される。十六メートルの長大な絵巻を用いる際の適切な支援である。

「話し言葉」は「書き言葉」と違い、瞬時に消えてしまい、再現が難しい。これが音声言語学習のネックとなりがちである。付箋を貼ることは、発表者にとっても聞く者にとっても、これを軽減させる方途となる。

中谷教諭が作成したワークシートについては後述するが、一時間目には、「だれの説明になっとくしたか」。二時間目には、「聞く人がなっとくする説明とは」と問いかけている。一時間目は、個別的で具体的な答えを要求している。二時間目は、より抽象度の高い一般化した答えを求める問いの出し方である。「言語で説明すること」に学習者の意識を向けると同時に、各時間ごとのめあてを教師が明確にもち、学習者は各時間の言語活動に取り組む過程で、段階を踏んで単元の目標が達成されるような支援が準備されている。

本時案（１／３）

（１）ねらい

雪舟作『四季山水図巻』から見つけた季節（春と冬）について、理由を挙げて自分の考えを話すことができるようにする。

（２）準備

『四季山水図巻』、学習プリント、付箋

（３）学習過程

学習活動	児童の意欲や関心 【期待する児童の変容】	指導上の留意点
この絵には、何が描かれているだろう。		
①描かれているものを見つけ出す。	・木、山、海、船、人 ・人々は何をしているのかな？ ・これは何の木だろう	・「なぜそう思ったのか」と問うことで、根拠を述べることに焦点を当てる。
理由を付けて、自分の考えを話そう。		
②『四季山水図巻』から四季を読み取る。	・水墨画って白黒だから分からない。 ・あそこが冬（春）だ。 ・だってあの部分には○○が描かれているから冬だ。	・冬と思う箇所には青、春にはピンクの付箋を貼ることで、自分の考えを顕在化させることができるようにする。 ・同じ結論でも異なる根拠を述べさせたい。独特な捉え方を図ることで、自分の考えを根拠づける言語活動を充実させたい。 〔言ｲ(ｸ)〕接続語や文末表現に気を付けて、自分の考えとその理由を話している。 〔聞〕友達の理由付けについて気付きを書いている。（振り返りカード考察）
だれの説明に納得できたかな		
③根拠の妥当性について話し合う。	・□さんは、自分が見たことのある冬の空と比べて説明したので、納得したよ。	・他者の説明の妥当性を振り返らせることで、根拠を挙げて説明することについて、再度考えさせる。
この絵には、何が描かれているだろう。		
④自分なりの感じ方を振り返る。	・目に見えるものだけじゃないんだね。	・同じ問いを示すことで、各自の感じ方、味わい方の変容を確かめる。

8 単元の評価規準

国語への関心・意欲・態度	話す・聞く能力	言語についての知識・理解・技能
・絵を用いて自分の考えを説明したり、友達の考えを聞いたりしようとしている。	・絵の中から必要な事柄を見つけ、自分の説明したいことを理由づけている。 ・説明に対する理由づけの妥当性についての気づきを述べている。	・接続語や文末表現の役割を理解し、考え及び理由を説明するために適切に使っている。

9 学習者の反応 ―ワークシートの記述から―

1時間目（ワークシート欄3　ふりかえり）

☆だれの説明に“なっとく”したかな？☆　●は不明字

（学習者ａ）ぼくの●理由になっとくしました。冬の日はさむくてかぜをひいてしまうから家を出ていないから冬だと思う。春だと花がきれいだからあつまっている

（学習者ｂ）○○さんの意見にさんせいしました。春の説明をする時「色がついていてさくらだと思います。」という意見に賛成できました。

学習者ａは、絵から読み取った情報と、これまでの生活経験を懸命に結びつけている。中谷教諭が感じた季節がめぐり人が動いている感覚を学習者も感じている。

2時間目（ワークシート欄2　ふりかえり）

聞く人がなっとくする説明とは、

（学習者ｃ）ぐたいてきな理由をつけて説明することだと思います。理由は、ぐたいてきだと分かりやすいからです。

（学習者ｄ）理由をつけて、自分のけいけんもつけて言うといいと思います。

（学習者ｅ）○○さんのもくもくという音です。きりがでてくる時をイメージしたのがよかったと思いました。

二時間目には、「聞く人がなっとくする説明とは」と、抽象度を上げた問いが出された。学習者は時間ごとのワークシートを記入する過程で、個別の説明の妥当性から、「ぐたいてき」「自分のけいけんもつけて」という一般化した「分かりやすい説明の仕方」の要件を見出している。

一方、課題のある学習者もいる。（抽出児２は割愛した）

（抽出児１）生活経験や既知の事柄をもとに自分の考えを形成することが難しく、自分の考えを表現する語彙も乏しい。表現する内容は、他児童の模倣に留まっていることが多く見られる。／「四季山水図巻」から季節を見つける活動において、付箋を貼ることはできたものの、理由を述べることは難しかった。（前時では、「Ａさんが、ここに付箋を貼った理由をみんなで推理してみよう」と教師が発問し、他児童が様々な理由付けを述べたものの、本児自身が理由を説明するまでには至らなかった。）／本時では、「理由を付けて自分の考えを説明する」と

いうめあてに対する達成感を味わわせたい。

ひとりひとりの学習者の実態、時間ごとの目標の達成度を把握し、個々の問題点を克服するためのきめ細やかな支援が積み重ねられていることがわかる。開発した学習材により個々の学習者の学習、また教室全体の「共同の学び」を成立させるためにはこうした教師の支援が欠かせない。

三　山口国語教育学会での公開授業

白石小学校での全三時間の実践の後、中谷教諭は、平成二四年八月一一日に山口国語教育学会で、附属山口小学校四年二組を対象として公開授業を行った。授業は、白石小学校での単元「理由を付けて説明しよう」の一時間目の授業をもとに再構成されたものである。主な学習活動は次の通りである。

①『四季山水図巻』に描かれているものについて自分の言葉で表現する。
②絵から見つけた秋らしさを説明する。（秋と思う箇所に付箋を貼る。説明を聞いて「分かりやすい」と感じたら拍手で表現する。）
③分かりやすい説明について話し合う。（ＶＴＲで互いの説明を振り返らせる。）

四五分の公開授業であるため、②は秋らしさを説明することに限定された。白石小学校と同様に、春と秋の見分けが難しく意見が分かれた。学習者は自然よりも人事に注目する傾向が強かった。授業の後半は、ＶＴＲで互いの説明を聞き、誰の説明が分かりやすかったか話し合った。

公開授業のあとの協議では、次のような発言があった。

・言いたくなる気持ちにさせる素材である。
・観点の発見がある。流れで説明している。十六メートルは、「話すこと・聞くこと」学習の素材としてよい。
・違うのではないかという意見が出たことで、話し合いが始まった。
・素材の特色が生かされている。時間が流れていて、人のくらしがあり、自然がある。よく見ることが言葉を生み出している。

中谷教諭が単元設定の理由で予測したように、水墨画であることと、四季を描いた絵巻であることが、学習者の感じ方、見方の違いを生み、話し合う必然が生まれた。

授業参観者のアンケートの一部を紹介する。[10]

・「イチョウがあるから秋だ」という児童の主張に対し、「ほかのところにもイチョウがあるから、秋ではないかもしれない」という趣旨の反論があったが、すばらしい発言だと評価したくなった。誰かの発言に対して、自分の発見を根拠として反論できたものであり、授業者のねらいであった内容の妥当性について意見を述べることに合致すると思う。
・子どもたちの絵に対する好奇心が感じられ、目を輝か

せて授業を楽しんでいた。

長大な絵巻に見入り、自分の発見を根拠に「秋らしさ」を主張し合う学習者の姿は、授業ということすら忘れて、絵巻の世界に入り込んでいるようであった。

四　おわりに

中谷仁美教諭の実践を考察対象として、「話すこと・聞くこと」学習における地域の文化財を用いた学習材開発の実際と学習を成立させる具体的な手立ての解明を試みた。「学習者が学習材を媒介として主体的に学ぶ（＝学習する）ことと、指導者が教材を媒介として教えたいことを教える（＝指導する）ことを同時に成立させる」[11]学習材開発の具体を明らかにすることができた。学習者個々の学びの実態と変容、「共同的な学び」を成立させた教師の授業力の解明は今後の課題としたい。

〈注〉

1　山口県教育委員会『これが私の故里だ～山口県伝統・文化教材集～』（平成二二年一二月）四頁。

2　堀江祐爾「『古典の指導』が『言葉の学び』になるように」『教育科学国語教育』七〇一号（明治図書、平成二〇年一二月）八頁～一〇頁。

3　矢澤真人「『伝統的な言語文化』と国語科教育」『月刊国語教育研究』（日本国語教育学会、平成二一年一月）四頁～九頁。

4　文部科学省『中学校学習指導要領解説国語編』（東洋出版社、平成二〇年九月）一一八頁。

5　4に同じ。

6　山口県立美術館『雪舟への旅』（第二十一回国民文化祭・やまぐち二〇〇六特別企画展　没後五〇〇年記念、平成一八年一一月）二七頁。

7　大村はま『大村はま国語教室6作文学習指導の展開』（筑摩書房、昭和五八年四月）。中西一弘編『新版やさしい文章表現法』（朝倉書店、平成二〇年五月）。鹿内信善編著『看図作文指導要領―「みる」ことを「書く」ことにつなげるレッスン―』（渓水社、平成二二年五月）ほか多数。

8　学習の実際は、中谷教諭へのインタビュー（平成二五年一月）とお借りした学習指導案、学習者が記入したワークシート、単元構想の際の参考資料をもとに筆者がまとめたものである。

9　1に同じ、三六頁。

10　山口県防府市教育委員会荒瀬淳子指導主事がまとめられたものから引用させていただいた。

11　世羅博昭「国語科学習指導の原理―学習者研究をふまえて―」『国語科教育実践・研究必携』（全国大学国語教育学会編、学芸図書、平成二一年五月）五〇頁。